

佐伯敏郎先生のご退官によせて

高橋正征（植物学教室）

佐伯敏郎先生は本年3月に定年退官されることになりました。佐伯先生は昭和25年3月に東京大学理学部植物学科を卒業された後、同大学院に進学され、門司正三教授のもとで昭和35年に理学博士の学位を受けられました。昭和29年4月に理学部助手として任官、植物学教室に勤務され、昭和50年4月には教授に昇任されて植物学第4講座生態学研究室を担当されました。

佐伯先生は昭和29年に門司先生と共著で“植物群落内の光条件とその物質生産に対する意義”と題する論文を発表されました。この論文は、それまで社会学的アプローチが主力であった植物生態学の分野に、新たに生長現象を基礎とした物質生産アプローチを提案することになり、内外の研究者の絶大な評価を受け、今では世界的な古典となっております。物質生産アプローチによって、それまでは単なる相関関係でしか把握できなかった植物の生活と環境作用が、明瞭な因果関係を背景とした定量的把握へと発展し、生態学諸現象の解析を飛躍的に発展させたことは余りにも有名です。以来30余年を経た現在でも物質生産アプローチは健在で、世界中で数千人にのぼる研究者が精力的に研究を進めており、その影響の大きさを示しております。これらの業績に対し昭和53年に朝日賞が贈られました。また、この偉大なお仕事、卒

業研究として進められたものということで、佐伯先生の非凡な才能をうかがい知ることができます。こうした偉大な研究業績を残された背景には、先生のもっておられる強力な集中力が大きく働いていると推察いたします。先生は腕組みをされて、何時間も何時間も廊下を往ったり来たりされながら考えこまれたり、乗車された電車が終点について折り返しているのにも気づかずに考えに夢中になられたり、という佐伯先生ならではの行動やエピソードをたくさんおもちです。

大学教官は研究者、教育者であると同時に、教室など学内の、あるいは学会をはじめとした学外の諸設をこなすことも重要な仕事で、大方の人が何気なく処理してしまうようなことでも、佐伯先生はとても気をつかわれながら処理されていたようです。教室主任をしておられた時には、入試の監督などはまずご自身を選ばれて、他の人に依頼する分を極力少なくされたのなどその一例で、これは先生の律義で、はにかみやのご性格によるところが大きいようです。ご定年とともに多くの役職から解放されるので、それを1日千秋の思いで待ってられるのも先生のお人柄です。ただ残念ながら諸役からの完全解放というわけにはいかず、例えば昭和65年に始めて日本で開催される国際生態学会では実行委員長を務められるなど、ご定年

後もまだ大きなお役がいくつか残っております。

4月からは新設学部で教育と研究を続けていかれることになっていると伺っており、先生ご自身も、4月からは特に研究活動に多くの時間がとれそうだと、期待しておられます。先生が研究に熱中しておられるお姿を拝見しておりますと、研究活動が若い世代の特権のように思われている世の中の固定観念が先生には全く当てはまらず、現在

でもなお若々しく、独創的な研究をなさるに十分な気迫をお持ちです。学会のご講演で数多くの聴衆をひきつける強力な魅力をもっておられることから、それをうかがい知ることができます。雑務から解放されて、もう一度生態学の深奥に迫る偉大なお考えをご呈示下さることを期待しつつ、先生をお送りしたいと思います。